

平出 隆著

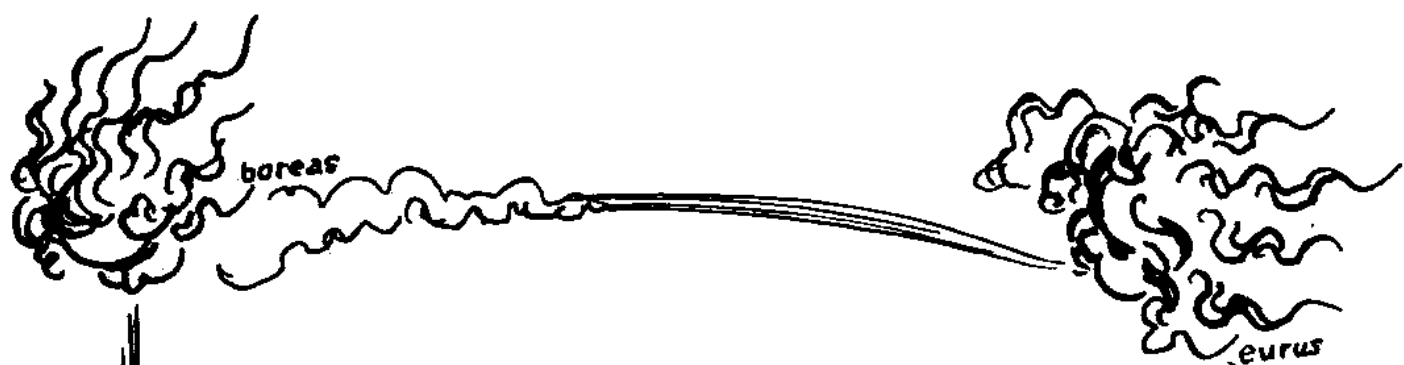
白球礼讃

ベースボールよ永遠に



岩波新書

64



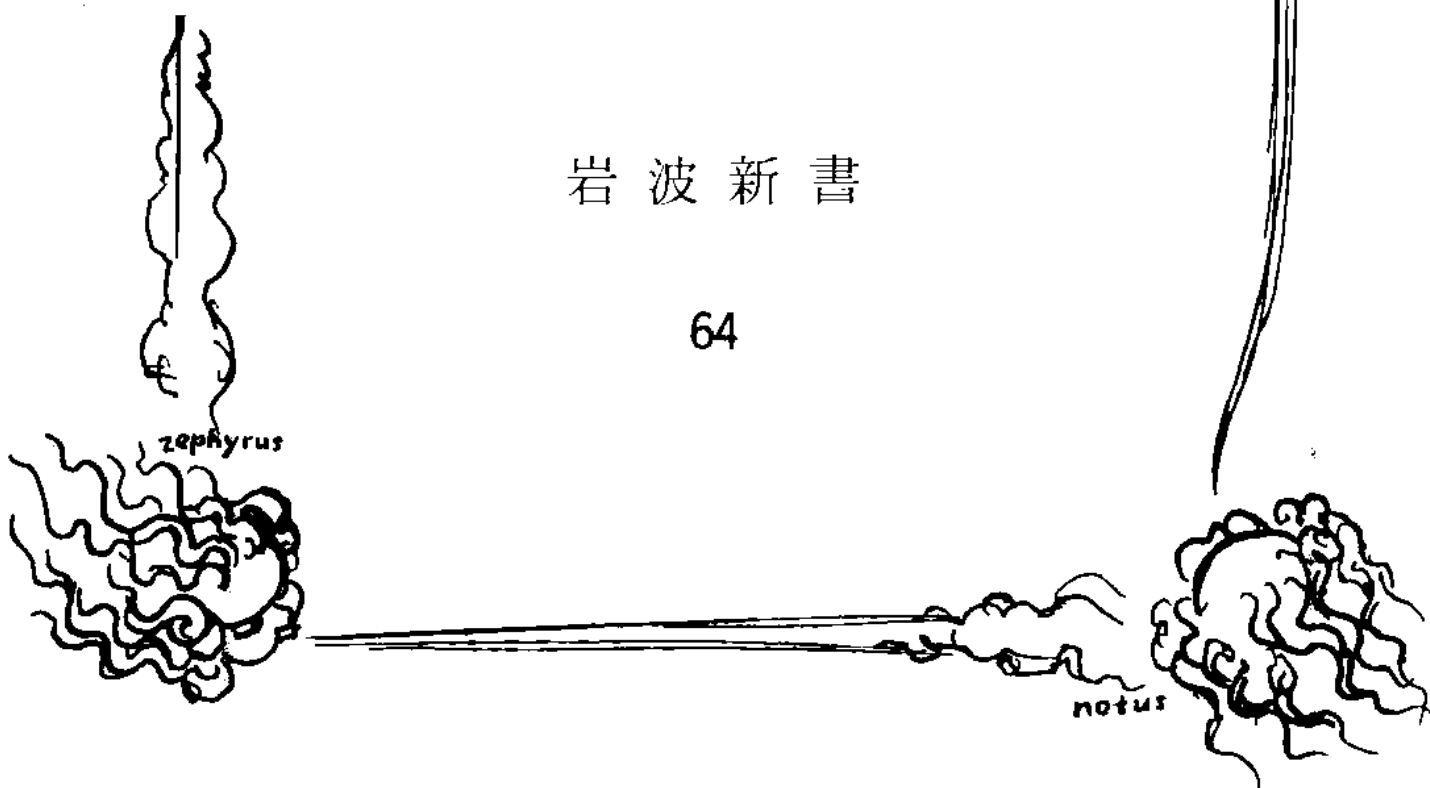
平出 隆 著

白球礼讃

ベースボールよ永遠に

岩波新書

64



平出 隆

1950年福岡県北九州市に生れる

1976年一橋大学社会学部卒業

詩人

詩集一「旅籠屋」(紫陽社)

「胡桃の戦意のために」(思潮社)

「若い整骨師の肖像」(小沢書店)

「家の緑閃光」(書肆山田)

「平出隆詩集」(思潮社)

著書一「破船のゆくえ」(思潮社)

「攻撃の切尖」(小沢書店)

「ベースボールの詩学」(筑摩書房)

白球礼讃

岩波新書(新赤版) 64

1989年3月20日 第1刷発行 ©

定価 480 円

著 者 ひら いで たかし
 平 出 隆

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

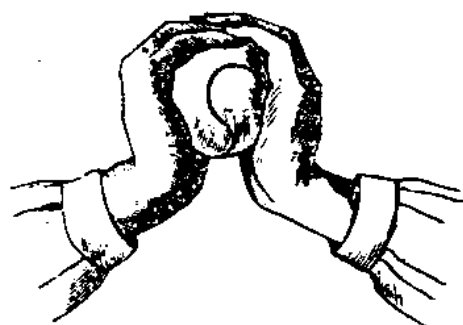
印刷・製本 法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-430064-9

白球礼讚

目次



○

—ダイヤモンドよ永遠に—

1

Ⅰ

—ライオンズとチョンギース—

13

2

—天職野球への道—

37

3

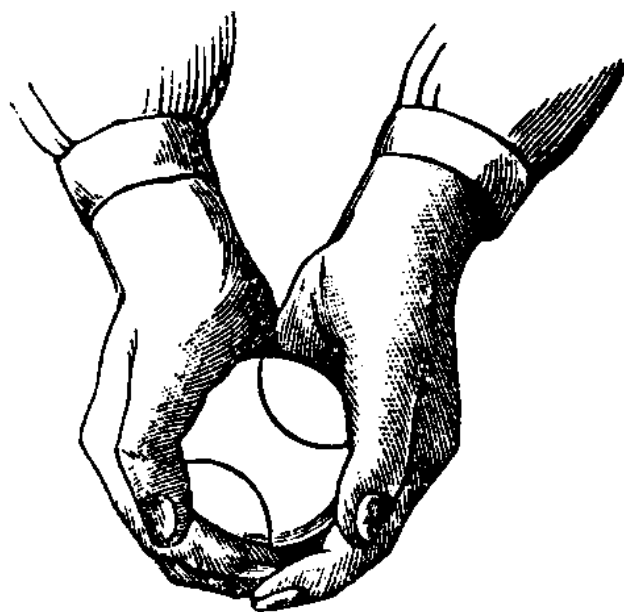
—たった二人のワールドシリーズ—

61

4

—クーパースタウン殿堂攻略記—

89



5 幻の軟式ボールを求めて 109

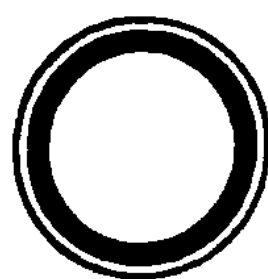
6 野をひらくバット 129

7 グラヴ職人との一タ 151

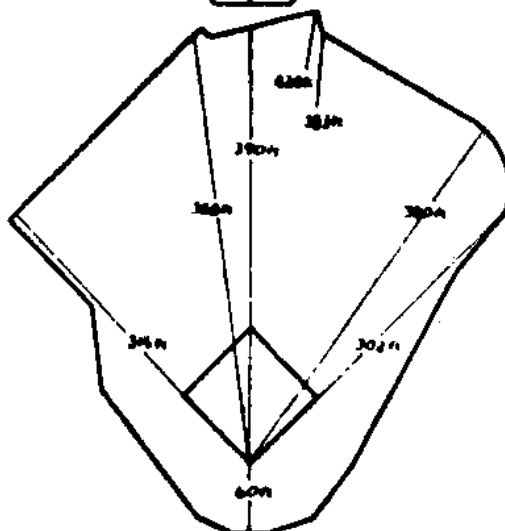
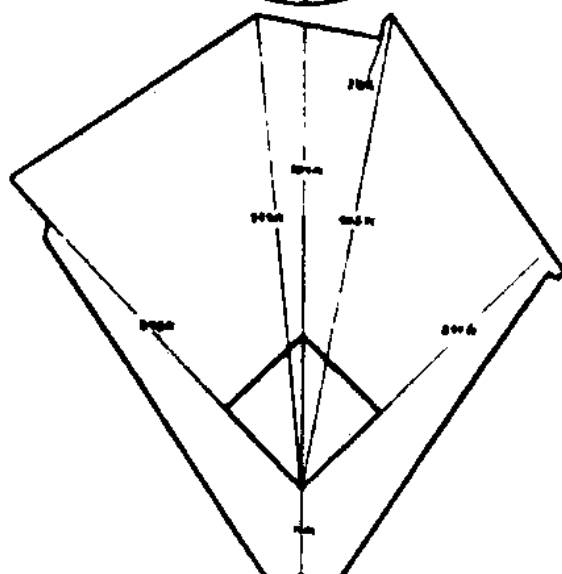
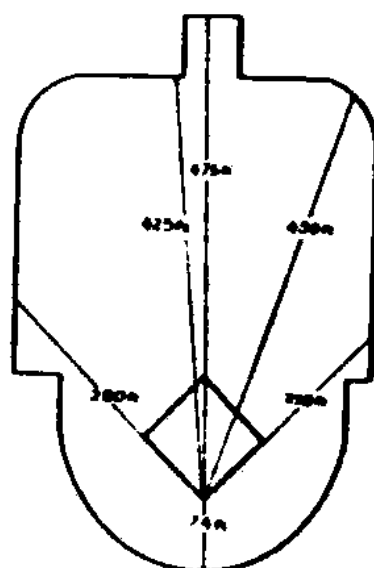
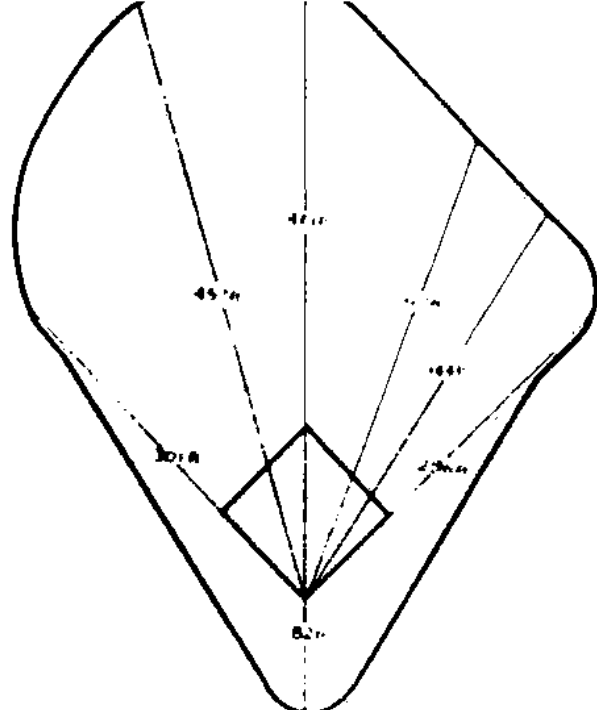
8 最後のシャドウベースボール 173

9 レオン・リー、ファウルズに^{きた}来る 195

あとがき 221



ダイヤモンドよ
永遠に



ボールが一撃されたなら
飛び出していくよ 少年は
さだめられた次の杭へ
そして 飲びいっぱいホームへ

作者不詳

ダイヤモンドの不思議

一九八三年の夏、ニューヨークのヤンキー・スタジアムで、ニューヨーク・ヤンキース対ボストン・レッドソックスの試合を観たのが、ぼくのはじめてのメジャーリーグ観戦だった。切符を買って薄暗いスタジアムの建物に入ったところ、上の階へ行く通路には階段がなかった。スロープ状になった長い柱廊がつづいているばかりで、それをいくつも折り返しながら昇っていくと、一塁側やバックネット寄りの三階席に出た。そこには、七月の日射しに日向ぼっこをかねた上半身裸の観客たちが、試合前から、もうビールをやりながら騒いでいた。

眼下、とっていいほど急な角度にダイヤモンドを見下ろして、ぼくは、不思議に新鮮な驚きを覚えていた。それが、われわれの日ごろ遊んでいるダイヤモンドと同じ形、同じ大きさをしていたからである。試合がはじまり、その場に、巨軀豪力の選手たちが素早い動きをくりひろげはじめると、この驚きはいよいよ深まっていくばかりだった。

九十フィート四方の正方形。その中心よりやや遠くからひとつの頂点に向って投じられた白球が、頂点のもつ九十度の内角のひろがりへ向って打ち返されて、この競技は遊ばれていく。

少年野球やソフトボールは別にして、すべての公式のゲームは、同じ塁間で行なわれる。草野球も、プロ野球も、同じ九十フィートなのである。そのことを頭で分ってはいたのだが、はじめて目のあたりにするメジャーリーグの球場とプレイヤーたちに興奮したせいか、ぼくはその日、このあたりまえの事実に驚いたのである。ベースボール・ダイヤモンドというものの不思議に、いまさらのように目を吸い寄せられていったのであった。

ベースボールの魅力の基本的なもののひとつに、内野ゴロのクロスプレイがある。次の塁に達しようとする走者と、捕球および送球に要する時間との競争である。

メジャーリーグの選手の体力や技能と、われわれアマチュアのそれとでは、まさに雲泥の差がある。スター選手たちの打球の速さ、肩の力は、われわれに倍するほどである。それなのに、内野ゴロのアウトとセーフは、ほとんど同じ質量のスリルを味わわせてくれる。

この理由には、いろいろの角度からの検討が可能だろう。使用球のちがい、ポジショニングのちがい、脚力のちがい、等々。要するに、さまざまな点でのレヴェルのちがい、が連動し総合されることによって、かえってそこに等質の空間が生み出されていくのである。いいかえれば、さまざまなレヴェルのちがいをつつみ込むだけの神秘を、ダイヤモンドはもっているということである。こうして、ベースボールの歓びは、メジャーリーグの球場から草野球の球場に移っても、少しも減じはしないのだ。

試合がすすむにつれて、ぼくは、ヤンキー・スタジアムの外野のひろがりを目を奪われていった。

ヤンキー・スタジアムの外野フェンスが、奇妙にいびつな曲線を描いていることはよく知られている。左中間のフェンスが大きくふくらんで遠くまで延び、ライトのフェンスが極端に近いのである。ベーブ・ルースやルー・ゲーリッグらの力ある左打者が、この本拠地でホームランを量産した、その蔭には、この極端にいびつな形が大いに加勢したともいわれている。

それにしても、この不思議にいびつな曲線は、どこからきているのだろうか。アメリカの比較的古い野球場の図面を見ると、ほとんどのフィールドが、それぞれユニークな、いびつな扇の形をしていたことが分る（本章の扉ページ参照）。

現存する野球場で、古いもののほとんどは、今世紀初頭につくられている。それらのうち、

シカゴのリグレイ・フィールド、ボストンのフェンウェイ・パークなども、常識では考えられないほど、外野フェンスの描く線が不定型に波打っているのである。

もちろん、diamondは不変である。そして、ホームベースを起点にして右翼方向と左翼方向に延ばしたファウル・ラインが、ひとつの扇形をつくることに変りはない。しかし扇の弧の部分の描く線は、これらの古い球場においては、それぞれまちまちなのである。

戦後につくられた近代的なスタジアムでは、フィールドはたいてい、センター・ラインを中心にシンメトリックに、きれいな扇形につくられているというのに、旧式の球場のこの不規則性は、なにを示すのだろうか。前の世紀からひきつがれてきたベースボールの、どのような始原の名残りなのだろうか。

野球場について書かれたいくつかの書物にあたってみると、この歪みは、街の中心部のかぎりある空き地をつかってそれをしつらえた名残りだということが分る。ベースボールが興行として成立したばかりのころ、野球場は主要な駅の近くや市街地につくられることが多かった。こうして生れたものが「都市内球場」と呼ばれるものである。だが、やがて周囲の建物が過密になってくると、老朽化した野球場は郊外へと弾き出されるような事態になる。

さて、ベースボールがビジネスとして巨大化し、一方では市民のあいだに自家用車が普及するようになると、交通とのからみも変わってきた。駐車場の必要が、野球場の郊外への移築をい

っそうつよく促すようになったのは、戦後のことである。そうして、広い郊外に設計された球場からは、あの外野フェンスのいびつな弧は消し去られてしまうことになる。

このおかしい曲線は、けれども見えないままに、いつまでもベースボールというゲームの中に潜むものとなった。それはそのまま、空き地のスポーツとしてのベースボールの本質を示すものだからである。

ベースボールはもともと、町の中の空き地の遊戯であった。その草創期の形態のひとつは、その名もタウン・ボールと呼ばれたし、いわゆる草野球のことは、サンドロット・ベースボールといわれている。サンドロット、すなわち空き地である。人がはじめてベースボールという球戯に出会うのは、多くの場合、空き地での子供たちの遊びにおいてであり、そこにあるのは、いびつな形の原始的なフィールドなのである。

原っぱの祝祭

ヤンキー・スタジアムのあまりにも不定型な外野に呆れながらも、ぼくはそこを、きわめて親しいものにも感じはじめていた。休日ごとにぼくがクラブ・チームの仲間と遊んでいる東京の野球場もまた、ごく自然にいびつなアウトフィールドを形成しているからである。そして、

このいびつな図形を遠い記憶に溯った淵源には、少年時代に遊んだ「空き地」、あるいは「原っぱ」があり、日の暮れ切るまでの球遊びの感触が残っているのであった。

そのチームは「永黒^{ながぐろ}チョンギース」といった。「永黒」というのは、北九州のもっとも本州に近い半島部である門司の、浅い山あいにある、当時は新開の小さな町だった。「チョンギース」の名は、その原っぱに多く見られるほっそりと青い小ぶりのバッタの一種を、その地方でチョンギースと呼んでいたところからつけられた。

チョンギースの面々は、じつにいろいろの人たちであった。チョンギースを思い出すとき、メンバーのいろいろであったことが、まっさきに浮んでくるほどである。

ステテコ姿の「鉄道の人たち」の中には父がいた。父の同僚の佐々木さんや田久保さんは、越して来たところにあった原っぱで、野球を覚えたばかりだった。佐々木さんの息子の信男ちゃんと敏男ちゃんもチョンギースの一員で、敏男ちゃんとぼくともう一人同い年の丸林君の三人は、低学年の三羽鳥といわれていた。ユニフォームというものがないチョンギースで、丸林君とぼくだけが、独自のユニフォームをそれぞれデザインして着ていた。

中で忘れられないのが、片腕のない高校生の竹内さんである。外野ノックでフライを捕ったとき、魔術のように素早い一連の動作で、グラブを脱ぎはらった手にボールをもち変え、矢のような速球でキャッチャーまで返した。足のやたらに速い杉山君は姉の同級生で、走っている

ときも、眠そうな狼の眼をしていた。彼と同年の上野君は、冬も半ズボンを穿いている美少年だったが、負けん気が強くて、アウトや三振の判定でいつも大悶着を引き起していた。

ノックのフライがファウルになって落ちてくるはずれには、必ず双子の姉妹がいた。よく日に灼けた長い手脚をゆっくりとつかって、楽しそうに、うまく飛球をつかまえた。屑屋の娘である彼女たちには弟がいて、ぼくと同級だったが、彼はちよくちよく山の中へ家出をしては、捜索隊のお世話になっていた。下校の峠道で一度ぼくに、いかにもごつい馬蹄形の磁石をくれたことがあったけれど、けっして野球の仲間には入ってこようとしなかった。ぼくは小学校二年生で、ゴロを捕ることでは大人にも負けなかった。

一九五八(昭和三十三年)、西鉄ライオンズの全盛期のころで、三年つづけての巨人軍連破に、九州全体が意気軒昂としていた。いや、その熱気は日本中に及んでいたにちがいない。しかし、青バットの天才・大下弘はグラウンドを去ろうとしていた。一方、巨人軍には恐るべき新人・長嶋茂雄が入団したばかりで、普及しはじめたテレビ画面の前に集って彼の華々しい動きを覗いては、西鉄ファンまでもが大騒ぎしていた。

チョンギースたちは、市営アパートとその周辺に住む連中だった。五歳から五十歳までにわたり、女の子まで混じっているこのチームには、ユニフォームもなければ規約もなく、公式の試合もない。出入りも自由、いつ頭数がそろって試合がはじまるか、油断がならなかった。と

きにはまったく見知らぬ人が、まぎれ込んで打席に立っていることもあった。

アパートは川ぞいに三棟が建ち並び、平行してさらに一列に二棟、計五棟が建っていた。敷地内には、あと二棟の建設予定地が盛り土をされ、粗く均されていて、そこが草むすチョンギスの棲息地、われらがチョンギスの本拠地であった。ぼくの家は川に面したひとつの棟の四階の端にあり、ヴェランダからは川のすぐ向う岸に牛小屋が見え、反対の窓からは空き地が見えた。そこにどんなメンバーが集りはじめているかは、搾りたての牛乳がたくさんのお椀に封じられ、トラックに積み込まれていくのを見るのと同じように、簡単に見ることができた。

チョンギスはそのうち、小学校主催の分団対抗戦に、永黒地区の代表として出場することになった。子供のチョンギスのほうは、低学年三羽鳥が主力ではなかなか勝ち進めるものではなかったが、大人のチョンギスは一九五八年、五九年と、ふた夏連続して優勝した。それは、わけの分らないうちの、どたばたの快進撃だった。ぼくたちは応援にまわった。日灼けした双子の姉妹も、声を嗄らして応援した。スタンドに花開いた彼女たちの明るい臍脂の日傘を、母は夢のように見上げていた。数日前に古雑誌といっしょに廃品に出した、自分の日傘だった。ぼくが小学校四年生になると、わが家はもっと市街のほうへと引越すことになり、チョンギスからも離れてしまった。その後、チョンギスは自然に消滅した。それは一九六一年のことだった。空き地だったところに、あたらしいアパートが建ってしまったからである。

始原的な遊び

アメリカで、ベースボールがはじめてその名で呼ばれ、かつそのルールがはじめて印刷された本というのは、一八三四年に刊行されたロビン・カーヴァー編『スポーツの本』である。そこに記されているルールは、イギリスの同種の本における「ラウンダース」の章を見出しただけすげかえたものであったが、つけられたあたらしい見出しは「ベースまたはゴール・ボール」というものであった。

『スポーツの本』にはまた、ボールとバットをつかうゲームをはじめてアメリカ人が描いた、注目すべきイラストレーションが掲載されている(第1章の扉ページ参照)。この木版画に描かれた場所は、ボストン・コモンと呼ばれるボストンの共有地、すなわち柵のない広い原っぱであるとされている。そこで遊んでいるのは、少年たちである。彼らの工夫は、この共有地の芝に、よう十字に交差する土の小径をうまく利用して、ホームベースと他の塁とのあいだの走路とし、芝のひろがりの中に巧みにダイヤモンドを截り出した、といわれている。

この種の打球遊びのアメリカでのイラストレーションは、とくにベースボールと名指されていないものにも及ぶなら、一八二〇年代にまで溯る。サミュエル・ウッドという人は一八二〇

年、『子供たちのたのしみ』という本を著わし、その中に、子供たちが空き地でボールとバットをつかって遊ぶさまを木版画にして掲げている(第2章の扉ページ参照)。「球遊び」とだけ題されているこちらのイラストレーションは、ボストン・コモンでの光景よりも、さらに町中の空き地の趣きを濃く呈しているようにみえる。しかし、いずれの絵にも共通しているのは、ボールを打って、塁間を走りまわるといふ遊びの形式の中の、子供たちの晴れやかな歓喜の表情であるといえるだろう。

それから、まちまちだったベースボール・diamondの大きさが定められたのは、一八四五年のことである。アレグザンダー・ジョイ・カートライトというニューヨークの消防士は、仲間たちとクラブ・チームをつくるにあたって、歴史上はじめて野球規則を成文化した。このとき、対角線の長さ四十二ペイス、すなわち塁間を九十フィートとするdiamondが生れたのである。今日に至るまで変更を加えられていないこの絶妙の発明によって、子供たちの遊びは、大リーグによる最高水準のスポーツと、ひとつの形式に結びつけられるようになったのである。

ベースボールの魅力は、大リーグーたちの、華麗で、豪快で、スピーディなプレイの中にこそあるのだろうか。それとも、これら、子供たちの遊びののどかな光景の中に見出されるのだろうか。この問いかけに対して、二者択一で答えることには明らかに意味がない。